

# 学会ニュース

第78号 2015年4月

## 目次

・2015年度学会費納入のお願い	1
・第37回大会について	1
・共通論題趣旨説：「18世紀の舞台音楽」武田 将明	2
・ミニ・シンポジウム趣旨説明：「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けて ー思想/文芸/歴史研究と手法としての情報ー」 深貝 保則	3
【エッセー】	
・「啓蒙ークリスチャン・ラクロワに白紙委任（Lumière ; carte blanc à Christian Lacroix）： パリ、コニャック・ジェイ美術館（Musée Cognac-Jay）紹介」川島慶子（名古屋工業大学）	4
・事務局より	7

## 2015年度学会費納入のお願い

代表幹事 長尾伸一

2015年4月より新たな会計年度となりました。払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願い申し上げます。年々、会計状況が厳しくなっております。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

## 第37回大会について

今年度の第37回大会は2015年6月20日（土）、21日（日）の両日、東京大学駒場キャンパス5号館で開かれる予定です。開催校責任者は大石和欣会員です。

共通論題とミニセッションが開催されます。共通論題は20日（土）開催で、「18世紀の舞台音楽」で、コーディネーターは武田将明会員です。ミニシンポジウムは21日（日）開催で、「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けてー思想/文芸/歴史研究と手法としての情報ー」で、コーディネーターは深貝保則会員です。（次ページ以降の趣旨説明をご覧ください。）

大会の詳細は同封のプログラムをご覧ください。

多くの会員が大会に参加されるよう、お願いいたします。ご出欠は同封の葉書でお知らせください。**5月29日（金）まで**にご返送ください。

## 18世紀の舞台音楽

武田 将明

(コーディネーター、東京大学)

Cambridge Companion to Eighteenth-Century Opera (Cambridge UP, 2009)の序文は、このように書き出されている。「18世紀オペラは現代文化における生きた芸術様式であり、新たな上演、録画や録音、さらには校訂版が続々と登場している。」同じ見解は、同書の第1章「プロセスとしてのオペラ」(Pierpaolo Polzonetti著)でさらに強く打ち出される。「18世紀オペラは前例のない復活を遂げつつある。私たち現代人の感性に可能なかぎり共鳴する手法を用いた新演出が次第に増えている。」たしかに、ヘンデルのオペラのDVDがこれほど数多く手に入るようになったのは比較的最近であろうし、また昨年話題となったテオドール・クルレンツィスの指揮する『フィガロの結婚』、『コジ・ファン・トゥッテ』のように、なじみの深いはずの作品の印象を一変する斬新な演奏もしばしば現れる。

他方で、19世紀以降のオペラと比べれば、18世紀のオペラを中心とする舞台音楽は、まだまだ未知の領域といってよい。前掲書によると、この時代には平均して年50作ものオペラが製作されていたというが、現代人が知っているのはそのほんの一部にすぎない。オペラは紛れもなく、音楽に留まらない18世紀文化全般の鍵をなす事象のひとつである。18世紀においてもオペラは一種の総合芸術であり、『スペクテイター』(1711-12, 1714)でアディソンが揶揄するような奇抜な演出によって大衆を魅了してもいた。ハーバーマス、イーグルトンが『スペクテイター』を「ブルジョワ公共圏」の成立を象徴する作品として重視したのはいまさら指摘するまでもないが、オペラはまさに、17世紀末から18世紀初頭にかけて生じたヨーロッパ文化の近代化を背景に発展している。

ただし、この発展はいわば弁証法的なものであり、イギリスにおけるジョン・ゲイ(およびゲイの協力者であるスウィフト)、ドイツにおけるゴットシェートなど、イタリア起源のオペラの作為性を諷刺・批判することによって近代的な感受性を確立する試みも見られるし、オペラ自身もまた、イタリア語から各国語を用いたものに推移するなど、国民国家の形成に対応した変化を遂げている。これが19世紀のヴェルディ、ワーグナーに代表される「偉大なるオペラ」の時代へとつながっていくのだが、20世紀のオペラをみると、ストラヴィンスキーの『放蕩児の遍歴』(1951)やジェラルルの『女家庭教師』(1949)など、18世紀からインスピレーションを得たものが見られるようになる。

このように、18世紀のオペラに向き合うことは、近代文化の重層的な理解につながり、なおかつ20世紀以降の文化を考える上での試金石ともなりうる。今回は、こうした18世紀オペラの多様な可能性を探究するために、あえて専門・世代ともに多彩な方々に集まっていたいただいた。20世紀以降のクラシック音楽に関する著述で知られる長木誠司氏は、文化史も視座に入れつつ18世紀オペラのドラマツルギーについて語り、モーツァルトを中心とした音楽研究者の森泰彦氏は、モーツァルトの同時代人マルティン・イ・ソレルのオペラを題材に18世紀オペラの同時代的な文脈を解き明かし、18世紀イギリスの美術・芸術論を専門とする岩佐愛氏は、ヘンデルとジョン・ゲイとの対立というよく知られたトピックに新たな光を当て、最近バロック歌唱に関する博士論文を完成させた大野はな恵氏は、現代におけるバロック歌唱の「再発見」に伴う問題点を明らかにする。

ここまで多岐にわたる議論をまとめるのは、一介の音楽ファンにすぎないコーディネーターには荷が重すぎる。そこで『オペラの18世紀』および『初期オペラの研究』の編者である丸本隆氏(早稲田

大学) にコメンテーターをお願いした。

本学会の年次大会では、18世紀音楽のコンサートをすることが恒例になっている。会場に少なからずいらっしゃるはずの音楽通の方々と共に、愉快で朗々とした談論の場を築ければと願っている。

## 第37回大会ミニ・シンポジウム 趣旨説明

### デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けて －思想/文芸/歴史研究と手法としての情報－

コーディネーター 深貝 保則  
(横浜国立大学)

近年、情報化の進展は人文的な学の領域においても相当に浸透している。手書き文書を画像に収録して劣化に備えるだけでなく、ネットワーク上に公開して利用の便を図るなど、デジタル人文学(digital humanities) と呼ばれる領域も育ちつつある。虫喰いなどで解読困難な文字について、当該文書の字体などを手掛かりにパターンを読み取り類推するなどの手法も育っているし、ロンドンのペンサム・プロジェクトが推進する **Transcribe Bentham** のように、ネットワークを介して有志による解読への参加を促す方式も試みられている。これらは稀少書類、書籍の画像を提供する側の試みなのだが、電子的なデータを研究に利用する側も手法を育てる必要がある。このミニ・セッションは、18世紀研究においてデジタル情報をいかに研究のツールとして利用するのか、議論を試みるものである。データベースのコンソーシアム方式が展開中でもあるので、国立情報学研究所の協力を得てサンプルを提供しながら、可能性と留意点をめぐって検討したい。

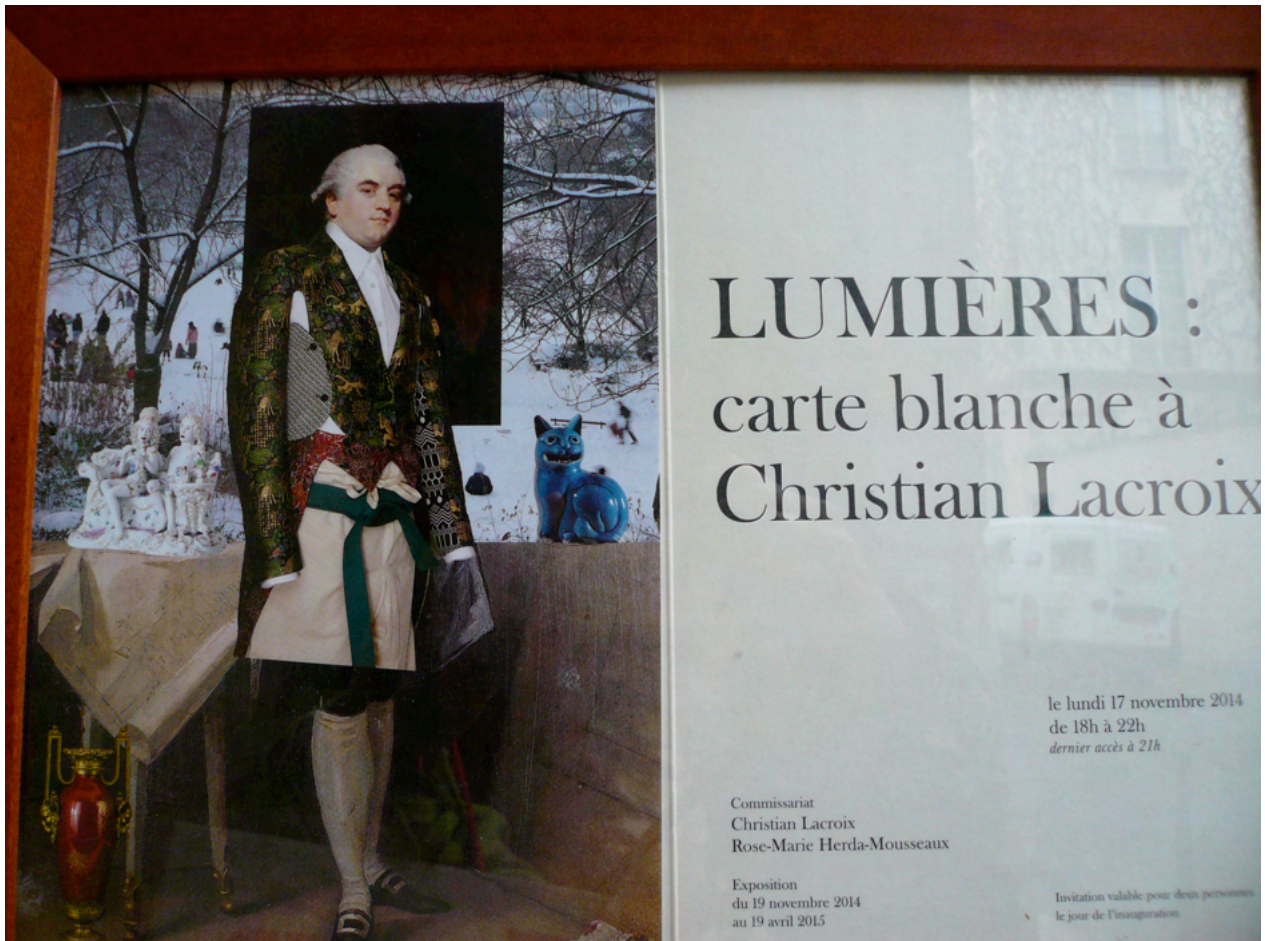
近年の、**google, europeana, internet-archive, gallica**などをベースとしたデジタル書籍の展開や、さまざまな研究機関や博物館などが所蔵する貴重資料コレクションの web 上でのデータ公開などは、従来に比して研究資料へのアクセスを大幅に改善した。とりわけ国立情報学研究所および国立、公立、私立それぞれの図書館の連絡組織の協力をベースとした **JUSTICE** の仕組みのお蔭で、コンソーシアム方式によるデータベースの導入も可能となりつつある。これらをいかに研究に活用するのかについて、画像を用いて具体的なサンプルを提供しながら今後の可能性を探る。

具体的には、日本の研究者によって推進されている『百科全書』のデータベース化の事業、オープンアクセスのデータベースを用いての18世紀英仏の修辞学の検討、情報学の知見によるテキスト分析の可能性、コンソーシアム方式のデータベースによる18世紀経済思想書籍の検討についてそれぞれ報告を行なっていただき、全体的な議論に付したい。

## エッセー

### 「啓蒙—クリスチャン・ラクロワに白紙委任 (Lumière ; carte blanche à Christian Lacroix) : パリ、コニャック・ジェイ美術館 (Musée Cognac-Jay) 紹介」

川島慶子  
(名古屋工業大学)



2015年の春、パリ出張の折の帰国便が夜であったことから、最終日にマレ地区（パリの中でも旧市街にあたり、17世紀の貴族の館が多数残っていることで有名）の美術館をはしごすることに決めた。最初に訪れたのが、ここで紹介する、18世紀美術館として有名なコニャック・ジェイ美術館である。

最後にここを訪れたのがいつかは思い出せないのだが、多分留学していたフランス革命200年記念の、1989年前後だったのではないかと思う。あれからパリの美術館の多くはかなり様変わりし、展示方法が近代的になった。また、町中の掲示板なども、外国人観光客にわかやすくなってきた。これは東京などでも同じだろう。「風情がなくなるな」と思ったりもするが、もし自分がまったくフランス語（東京なら日本語）ができない観光客で、それでも団体観光を好まないなら、こうした変化はたしかにありがたい。

話をコニャック・ジェイに戻すが、この特別展（2014年11月19日から2015年4月19日）はきわめて斬新な試みだった。というのも、クリスチャン・ラクロワは1961年にイヴ・サンローランが加盟して以来はじめて、1987年にパリのオートクチュール協会に加盟したフランス人デザイナーである。ラクロワは天才的クチュリエと見なされ、「フランスの国宝」とまで呼ばれ、数々の賞を受賞している。

それだけではない、ラクロワはもともと美術館の学芸員を目指していた人物で、エコール・デュ・ルーヴルの卒業生でもある。これだけ書くと、栄光に包まれていた人物のように思えるが、そうではない。なんとこれほどの評判と天才を持ちながら、ブランドとしてのクリスチャン・ラクロワは一度も黒字になったことがなく、2009年に経営破たんした。大衆が常に天才を受け入れるわけではないことを如実に示した例といえよう。

つまりコニャック・ジェイ美術館は、そんな人物に18世紀美術の館を「白紙委任」したのである。この選択はフランスならではの試み、さらに言えば発禁処分や逮捕を繰り返し経験しながらも、時代の先を見つけながら進み続けた『百科全書』の試みにも似て、きわめて18世紀的な知的冒険の試みだと言っていい。この選択だけでも、特別展に期待が高まる。異色のクチュリエは、18世紀をどのようにデザインしたのか。

この展覧会は、以下のような構成になっている。見学者はこの順番で1階から屋根裏に当たる5階まで上っていくことになる。

「18世紀の趣味」「流儀・感情・感覚」「音楽・興行・舞踏」「パリー光の世紀の首都」「ヨーロッパの芸術市場」「異国趣味」「古典古代の規範」「教育と知識」「教育理論」「肖像画と個人の出現」「ブーシェの世紀」「日常の文学・鏡の中の（さかさまの）物語」

最初の部屋は「18世紀」という文字こそあるものの、じつはこの美術館の創始者にしてサマリテーヌ百貨店の創業者、エルンスト・コニャックとその妻マドレーヌ・ジェイのための部屋である。基本的にはこの夫妻とサマリテーヌに関係する、19世紀末から20世紀初頭の品々が展示してあり、ここは昔とたいして変わらない。私たちはまず、コニャック・ジェイ夫妻の目線からすべてを始める。そしてラクロワが本格的に登場するのは次の展示室からである。

これ以外の展示室では、テーマごとに、それに関する18世紀の品々と、ラクロワ自身の作品および、彼が選んだ、そのテーマと「赤い糸」でつながれている作品が交錯する。たとえば「音楽・興行・舞踏」では、楽器を弾く女性を描いたブーシェの絵、当時の舞台衣装、豪華なチェス盤と共に、現代アートの彫刻やタペストリー、ラクロワ自身がデザインした舞台衣装が並んでいる。私が面白いと思ったのは、「ヨーロッパの芸術市場」の部屋である。18世紀の芸術と言うと、通常は作者と作品にばかり目が行ってしまう。しかし現実には、王侯や大貴族たちに外国の芸術作品を買わせるルートがあったわけで、この部屋を見ていると、この時代に、どんな風に、どのような美術品が流通し、市場で扱われていたのかということに改めて考えさせられた。

ラクロワとのコラボで印象的なのは「肖像画と個人の出現」の部屋である。ここでは当時の肖像画を所狭しと並べ立て、そこに現代の肖像写真と衣装、布地見本などを配置して、非常に不思議な空間を演出している。文句なしに美しいと思ったのは「ブーシェの世紀」と謳われた展示室で、ここにはブーシェその人の絵画だけでなく、当時の美しく贅沢な衣装、細かい細工を施した婦人用煙草入れのそばに、ラクロワ自身やビビアンヌ・ウエストウッドら、他のクチュリエの作った豪華なドレスが展示され、華麗なる世紀の豪華さと繊細さを一段と盛り上げている。最後の部屋は屋根裏で、展示物もさるもの、なんとも不可思議な空間が形成されており、妖精物語の舞台にでもいるような気分させられた。

こうして、中心主題である18世紀と、コニャック・ジェイが生きた19世紀から20世紀初頭、ラクロワの生きた20世紀後半と21世紀が交錯し、新しい世界が生み出される。それはフランスの伝統でもあり、また、ヨーロッパの混合、当時両インドと呼ばれた、全世界が交錯する場でもある。

ルーヴル美術館の広場に建つピラミッドに代表されるように、異質な要素を組み合わせ、時代や文

化を混合して新しいものを生み出すのはフランスの強みである。だからこそ人々はフランスを目指し、そこで開花することを望む。なぜならそこには「表現の自由」を受け入れる寛容さがあるからだ。ところがこの自由がいま、脅かされ、あるいは誇張され、文化的な寛容さがともすれば揺らぎだしている。今回の出張は、2015年1月に起きたシャルリー・エブドのテロ事件の後だけに、多少の緊張を持ってパリに入ったのだが、研究に関係するところだけを動いている限り、いつもの違いは感じなかった。もちろんコニャック・ジェイのような美術館にはいかなる緊張感もなかった。

ただ、技芸博物館 (Musée des Arts et Métiers) で働く友人と一緒に、その近くを歩いていたときに、たまたま通りすがりのパリっ子との会話で「ああ、やはりここでテロがあったんだ」と思い知らされることがあった。彼らはこの近くにある「ユダヤ博物館」を指して、「あそこの警備は尋常でない」と言っていたのだ。あのテロのあと、ヴォルテールの『寛容論』が、フランスならず、世界中で見直されだした。ヴォルテールがいまここにいたら何と言うだろう。異なるものを受け入れ、飲み込み、昇華してきたフランス。18世紀にあまたの啓蒙主義者が自由と寛容を求めて激しい議論を戦わしてきたパリ。ここからこそ、新しい「表現の自由」を発信して欲しい。ラクロワと18世紀のコラボをみながら、そんな希望を抱いたのである。





## 事務局より

### 会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

＜郵便口座振替で振り込む場合＞

口座記号番号：00800-7-183350      口座名称：日本18世紀学会事務局

＜銀行等から振り込みする場合＞

銀行名：ゆうちょ銀行      店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金      口座番号：0183350

### 『年報』への論文投稿について

すでにご存知と思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

### 国際18世紀学会について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct；フランス語版ではRépertoireという項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者（Pascal Bastien: [admin@isecs.org](mailto:admin@isecs.org)）に連絡してください。（英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。）

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

## 投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、例えば「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りま。

## 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

## 学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

## 年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

## 寄付のお願い

寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

## 学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

林 誓雄『檻樓を纏った徳 ―ヒューム 社交と時間の倫理学』（2015.2.10、京都大学出版会）  
x+270頁

## 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

## 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームペ



ージからダウンロードできますので、よろしくお願いいたします。

### メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお昨年9月より、新しいメーリングリストを稼働しております。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：王寺賢太（国際幹事）、大石和欣（常任幹事）、大野誠（常任幹事）、隠岐さや香、小田部胤久（国際学会執行委員）、川島慶子、小関武史（常任幹事、年報担当）、斉藤渉、坂本貴志（常任幹事、年報担当）、武田将明、玉田敦子（常任幹事）、寺田元一（東アジア交流担当）、長尾伸一（代表幹事）、馬場朗、逸見龍生（常任幹事、年報担当）、増田真

会計監査：安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第78号 2015年5月発行  
発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一  
事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局  
e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com  
tel: 052-789-2380  
fax: 052-789-4924  
<http://www.gakkai.ac/jsecs/>